日本計量生物学会

ニュース・レター　No.70

2000年1月

目　次

巻頭言
会長からの一言
理事会議事要旨
年次大会のお知らせ
日本学術会議報告
第7回計量生物セミナー（臨床の部）報告
IBC2000参加予定の皆様へ宿泊の重要情報のお知らせ
会員から

データマイニングとデータ電子化

二宮正士（農水省・農業研究センター）

99年度の計量生物セミナー生物の部のテーマはデータマイニング（Data Mining）だった。企画担当者の一人であったが，一般的に知られるデータマイニングの概念を勝手にかなり拡張して扱ったこともあり，まとまりがなかったとおしかりを受けそうである。しかし一方で，演者のみなさんには今後の研究に役立ちそうないくつものヒントを頂くことができ満足している。

データマイニングとはいうまでもなく，膨大なデータから未知の事実を導き出す作業であるが，一介の農学研究者として，近代農学が始まって以来100年超にわたり膨大な蓄積のあるデータをどうにかまとめてマイニングできないかと日頃思っている。どこの農業試験場にいっても，山のような書類や印刷物が所蔵され，中にはびっしりデータがつまっている。しかし，何度も解析に供されたデータは非常にまれであろう。ある目的のために行われた実験で一度解析されそのまま眠り続けているものがほとんどであると思う。私には宝の山に思えてならない。

さて，このような事を企てて最初にぶつかるのはデータの電子化の問題である。長期間に渡って取られたデータの精度や信頼性，品種・栽培方法の違いなどといった解析上の技術的困難より前に，コンピュータでマイニングできる対象を用意するのが一筋縄ではないのである。昔のデータはおろか，今日のデータでさえデータベース化してきちんと管理しようという機運が低いのだから当然かも知れないが，なにしろデータ電子化予算が付かない。情報化というかけ声は華々しいが，付くのはハードばかりという状況はなかなか変わらないようだ。

というわけで，最後には自分達で地道に電子化をするという覚悟をして，細々と始めるが，次に待っているのは，データベース作りにどんなに励んでも研究者として評価されないという心配である。などと，文句を言っているときに聞いた隣国の話。韓国は国を挙げて21世紀情報立国を宣言しているが，IMF危機でもの凄く印象的な政策をとったのとの事。公務員給与カットを原資に失業者対策を行った際，数万人という雇用を公的機関の既存の紙媒体上のデータを電子化するために振り向けたのである。農業研究機関だけでも，ほぼ2年にわたり毎日500名以上を雇用し，電子化作業を行う結果，過去30年分近くにわたる試験研究データが電子化されるという。この話，うらやましい以上に，その気になれば出来るじゃないかという安心感を持ったが，甘いだろうか。

会長からの一言

吉村　功

IBC（International Biometric Conference）を日本で開いたのは，1984年です。その後，ニュージーランドで開かれたことはありますが，アジアではＩＢＣが開かれていません。ＩＢＳ（International Bimetirc Society）としては，そろそろアジアで開いてほしいという雰囲気が出ています。IBS会長Nanny Wermuthさんが，IBC開催地を決めるAdvisory Committeeのメンバーの１人として私を指名してきたのは，そういう希望の一環だと思います。

これまでこのコラムでずっと言ってきたように，日本は国際的にもっと寄与すべきでしょう。その寄与の一つは，学会誌の編集ですが，その面での寄与は語学能力の関係もあって困難です。それに対して，学会の開催は過去の実績を見る限り，日本でも寄与が可能な側面だと思います。そういうこともあって，計量生物学会の理事会では，2004年か2006年に日本開催を申し出る，ということを今検討しています。

技術的にはけっこう大変で，特に資金面での目処をたてることが，日本の経済状況を考えると最大の困難になりそうです。でも，そういう困難を経費節約等で乗り越えて，場合によっては韓国，台湾等の協力を求めたりして，アジア開催を実現したいと思うのですが，会員の皆さんはどのようにお考えでしょうか。

これについての意見，コメントを寄せて下さるようお願いします。Faxでもかまいませんが，できればメイル（biometrics@sinfonica.or.jp）で送って下さい。理事会での検討の際に参考としたいと思います。

理事会議事要旨

1999年日本計量生物学会第４回理事会（メール理事会）議事要旨

日時：1999年７月21日送信

参加者：上坂，大瀧，大橋，越智，折笠，岸野，佐々木，佐藤（喬），佐藤（俊），柴田，丹後，椿，二宮，林，三中，三輪，柳川，山岡，吉村

議　題

１．前回議事録・議事要旨の確認

承認された。

２．各理事からの報告

佐々木会計理事から99年度上期の主要な収入・支出状況について，特に問題なしとの報告があった。

岸野編集担当理事から，審査結果が迅速に得られることでこの学会誌を特徴づけたいとのことと，論文の投稿のお願いがあった。

三輪年会企画担当理事から，本年の合同年次大会の報告があった。応用統計学会との合同年次大会は，1999年５月６日，７日に総評会館にて開催され，参加者は280名（両学会正会員177名，非会員70名，学生33名）。また来年の開催に向けて，１）会員への日程の通知は早い方がよいのでニューレター10月号に次年度日程を掲載したい，２）発表数が毎年漸増しており（今年度27），これ以上の申込みがあるとプログラムの構成が困難である，パラレルセッションを設けるか，ポスターセッションを設けるかなどの検討が必要ではないか，３）次年度も計量生物学会が運営を担当することとなったので，プログラム編成作業委員長を決めてほしい，と提案があった。講演数の増加への対応としては，パラレルセッションやポスターセッションを積極的に考えるべき，という意見が多かったが，口演時間を十分に取るというのであれば賛成，パラレルセッションやポスターセッションにすると演題数が減る可能性がある，などの意見もあった。これらについては，連絡委員会で検討してほしいという要望があった。

大橋理事から「試験統計家のための資格・要件検討WG」について報告があった。1998年４月11日，1999年３月22日，６月15日に討議を行い，その内容を踏まえたコンセンサスペーパーを執筆し，WG内部の校閲，加筆修正を経て2000年の合同年次大会で発表する予定。

セミナー企画担当理事，臨床の部，折笠理事から，10月の計量生物セミナーの臨床部門のテーマについて意見や希望，その他あれば連絡してほしいとのこと。生物の部，二宮理事からは，テーマ：「生物情報のデータマイニング－　ゲノムから群集へ」を予定している。

セミナーの運営について，佐々木理事から，セ

ミナー事務方の手配も考慮してほしい，事務局（シンフォニカ）の業務に「セミナー」は含まれていないので，事務的な業務をどうやってこなすかを考える必要がある，という意見があった。これを受けて佐藤（俊）庶務理事から，「参加申込書」を作成してニュースレター７月号に同封するまでは佐藤（俊）のところでやるが，それ以降の事務作業をどうするかは，セミナー担当理事で話し合って８月中に案を作ってもらい，具体的にセミナー担当理事，庶務理事，会計理事で相談して決めることにした。

３．セミナー臨床の部プロシーディングスの刊行

計量生物セミナー臨床の部は「第５回と第６回を一緒にし，雑誌のSupplementとして出版を予定（1999年第１回理事会議事録）」していたが，その後の進展を確認したところ，第５回は１名の演者を除き最終原稿提出済み，第６回は１名の演者のみが最終原稿を提出とのこと。このままでは，第５回，第６回を合わせて刊行することは難しいと思われ，第５回セミナー臨床の部を先に刊行することとし，９月初めには第５回原稿を印刷所に渡すことにしたい，と提案があり，了承された。また，第６回セミナー臨床の部の原稿未提出の演者にも締め切りを伝えることとした。

４．IBC2000招待セッション

バークレーで開催されるIBC2000の特別セッションが決定したと報告があった。

５．事務局から

アクセスによる新しい名簿管理システムが今月中には稼動開始の予定。ただ，会費納入状況などは今までカードでしか管理していなかったので，全会員分を入力する必要がある。名簿管理システムの移行に伴い，請求書付き払込用紙のプリントアウトが可能になる。印も印刷できるが，これまで通り会計理事名とすると，理事交代の度に変更しなければならない。このため，今後は学会名，学会印の印字することにする，と報告があった。

６．次回理事会

10月27日（水）午後５時半から統計数理研究所で開催予定。

1999年日本計量生物学会第５回理事会議事要旨

日時：1999年10月27日17：00～18：45

場所：統計数理研究所

出席者：大橋，越智，岸野，佐藤（俊），椿，三中，三輪，吉村，風間（事務局）

議　題

１．前回議事録・議事要旨の確認　承認された。

２．第７回計量生物セミナー報告

佐々木理事からメールで会計に関する報告があった。参加者は生物の部20名，臨床の部111名。またキャンセルの扱いとセミナー手順書について，佐々木理事から提案があり，次回までにそれに沿った案を作ってもらうことにした。

今回はテーマの決定が遅れ，理事会で検討する時間が不足していた。また，事務局移行後のセミナー事務についての対応も遅れてしまったので，来年は，年会時の理事会までにセミナーテーマ案を出してもらい，年会時の理事会でセミナー事務体制を決定する。

セミナーのプロシーディングスについて，雑誌計量生物学の増補として発行することは決定しているが，今回の雑誌の電算写植化にともない，セミナープロシーディングスをこれまで通りオフセット印刷とするか電算写植とするかを議論し，第５回から電算写植で出版することになった。

３．2000年合同年次大会について

2000年の応用統計学会・日本計量生物学会合同年次大会は，５月11日（木），12日（金）に総評会館（お茶の水）で開催予定。

吉村会長から，10月１日に開催された応用統計学会との連絡委員会について報告があった。年々一般講演の申し込みが増加していることから，パラレルセッションやポスターセッションを考えなければならない。会場の都合でパラレルセッションは無理であるので，確保してある部屋を利用して10件程度のポスターセッションを企画できないか検討中である。次回の連絡委員会は12月７日に開催予定。

特別セッションのテーマ：佐藤（俊）から提案があった「がん検診の有効性評価を考える（仮題）」が承認された。オーガナイザーは祖父江友孝氏（国立がんセンター研究所）と佐藤俊哉が務める。

また2000年のプログラム編成作業委員会，計量生物側メンバーは年会企画担当の上坂，椿，三輪各理事，庶務担当の佐藤（俊），さらに今年同様大野満夫氏（サイエンティスト社）にお願いする。

４．2001年ISIサテライトミーティング

柳川理事から書面にて，2001年８月末にソウルで開催される国際統計協会会議のサテライトとして2001年８月30日（木）～９月１日（土）に福岡ソフトリサーチパークで「International Workshop on Statistical Challenge in Environmental Problems」を開催予定だが，計量生物学会主催とできないか，どのような話題にしぼるべきか，などについて検討してほしいと依頼があった。

先進諸国の環境問題だけではなく，アジア諸国で現在問題となっていることを取り上げるべきだという意見があった。参加，協力を呼びかけたい関連学会としては，リスク学会，環境科学会，環境経済政策学会，日本疫学会，大気汚染学会，環境教育学会，などの名前が挙がった。

このサテライトは計量生物学会主催で行うこと，オーガナイザー等には関連学会からもメンバーに入ってもらうことが決定された。

５．その他

学会ホームページ：応用統計学会でも作成の予定であり，シンフォニカの樺山さんにデザインなどはお願いする。問題はホームページに掲載する内容とその更新であり，これらについては広報担当の林，山岡理事に担当してもらうことにした。

岸野編集理事から，計量生物学の今年度第１号を出版したと報告があった。

2004年のIBC立候補：日本でIBCを開催しなければならない時期にきているが，どうしても2004年ということではなく，2004年または2006年くらいを目指して日本で開催する努力をする。その再，韓国やほかのアジアのNational Groupとの共催も検討してはどうか，との意見があった。本部から正式に立候補の依頼がある前に，柳川Council Memberに内々に日本の意向を伝えてもらう。

６．次回理事会

12月の連絡委員会の後にメール理事会，来年３月に年会のプログラムが決まった後，理事会を開催する。

年次大会のお知らせ

2000年度日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会のお知らせ

１．期　日：2000年５月11日（木），12日（金）

２．会　場：総評会館

（〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-2-11：JR「御茶ノ水」駅下車徒歩７分）

３．参加費：正会員4,000円，非会員6,000円，
学生（会員・非会員とも）1,000円

４．特別講演（講演題目はいずれも仮題）

廣津千尋（東京大学）「分散分析を越えて」

三浦良造（一橋大学）「金融工学と応用統計」

５．特別セッション

テーマ：「がん検診の有効性評価を考える」

オーガナイザー：祖父江友孝（国立がんセンター研究所），佐藤俊哉（統計数理研究所）

講演（演題はいずれも仮題）

辻　一郎　（東北大学医学部）

「これまでの日本のがん検診有効性評価のまとめ」

本田純久（長崎大学医学部）

「がん検診有効性評価の問題点について」

祖父江友孝（国立がんセンター研究所）

「ヘリカルCTを用いる肺がん検診有効性評価のデザインについて」

６．一般講演

１）申し込み方法

電子メール，FAX，または官製はがきに，著者全氏名，所属，演題名，代表者連絡先（郵便番号，住所，氏名，電話番号，電子メールアドレス）を記入し，下記宛てにお送りください。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2F
（財）統計情報研究開発センター内
連絡委員会事務局
e-mail：abstat@sinfonica.or.jp
FAX　03-5467-0484

２）申し込み締め切り：2000年３月３日（金）必着
代表者には「原稿作成の手引き」をお送りします。原稿は４枚，または６枚の偶数枚でお願いします。

３）予稿集用原稿締め切り：2000年３月31日（金）必着

４）申し込み数が多数の場合，一部の講演をポスターセッションとさせていただきます。あらかじめご了承ください。

７．英文要旨の掲載

日本計量生物学会では，会員，非会員にかかわ

らず合同年次大会での講演の英文要旨を国際計量生物学会ホームページ（http://www.tibs.org/）に掲載しています。本合同年次大会の講演で英文要旨掲載をご希望の方は，予稿集用原稿と一緒に英文要旨をお送りください。

日本学術会議報告

統計学研究連絡委員会委員長
第４部会員　吉村　功

総会などの会合が10月25日から28日にかけて開かれました。今までと同じように主観的に取捨選択をして情報を送ります。

１．学術会議の位置づけについての声明

一言でいうと，学術会議は学者の国会です。ですが現在は，学術に関する政策を学術会議で決めることができません。できることは，政府に対する勧告や声明を出し，日本の学者を代表しているということで「科学技術会議」や各省の大臣・担当官に圧力をかけ，要望を政策に反映させることです。

現在進行している行政改革では，この方式がもっと強まりそうです。人文科学，社会科学を含めた学術面での政策立案を，全面的に「総合科学技術会議」にゆだねようとしています。学者の総意を何かの政策に結びつけたいというときは，そのルートを通さなければならないことになりそうです。そうした場合，学術会議はどのような役割を果たすべきか，というのがこの１年半ほどの間議論してきたことですが，そのまとめが今回「声明」の形で採択されました。その正確な内容は「http://www.scj.go.jp」に11月中に掲載されると思います。

声明での一つの強調点は，総合科学技術会議がトップダウン型であるのにたいし，学術会議は今後もボトムアップ的に政策提案を行う，という宣言です。ボトムアップ的な政策提案は，たとえば国大協といった機関を経由してもなされていますが，理念的なこと，大学を横断する学会的なこと，国際交流的なことは学術会議経由の方がまとめやすいということでしょう。これらは現在の学術会議が重要な役割を担っている側面ですから，この声明は現状の方向性を追認し，それを変更する必要がないことを積極的に主張していることになります。

現在，各学会で第18期（2000年７月～2002年７月）の学術会議会員の選考が進められていますが，選考に当たっては，海外との交流，近縁学会間の研究連絡，科学研究費の審査員の推薦といった直接的な役割の他に，このような大局的な政策提案も重要だということを考慮に入れるようお願いします。

２．研究環境の改善についての勧告

大学に勤めている方で，スペースが十分だと感じている方がいるでしょうか？圧倒的に多くの人は，近年，研究室のスペースが窮屈になるばかりだ，と感じているのではないでしょうか。

これは元東大学長である吉川会長にとっても実感がある事柄だったようで，第４常置委員会がまとめた「大学の研究スペースを３倍くらいにすべきだ」という報告を，政府に対する勧告にしよう，と会長自身が全員に向かって提案し，今回の会議で採択されました。

報告の内容でもっとも強く述べられていることは，３年前に決められた科学技術基本計画では，５年間で17兆円を投入して大学等の環境整備をするといっていたのに，現状の国立大学の建物は基準面積に比べても500万平米不足，欧米に近づけるには1200万平米が不足である。このような土地建物を造るには数兆円で済むのに，なぜそれが実現しないのか，すべきではないか，というものです。つまりただ拡大を求めているのではなく，投入すべき金が設備備品の更新にばかり使われていて，スペースを拡げるのに使われていないのが問題だというわけです。

現在，経済刺激ということで道路や橋などの土木予算が国の支出に大きな割合を占めています。しかし大学等の条件を良くすることも，知的財産のためのインフラ整備であり，景気刺激策としては土木と変わらないのに，政治家にはそれが分かっていない。政治家にそれを分からせよう，というのが吉川会長の意向なのだろうと，私は解釈しました。

蛇足になりますが，前回報告したように，学術会議会員は，国立大学の元学長や元学部長といった方々が多く，大学というと国立大学を思い浮かべるようです。しかし年齢が60歳台後半という関係で，現職は私立大学であることも多いため，国

立大学中心の作文の中に，必ず私立大学の条件はもっと悪い，という文章が入ります。でもそれを改善する具体的な提案はなかなか学術会議に出てきません。いかにも日本的です。

3．その他

今年度の海外交流については統計研連から柳川堯委員がISIに派遣されました。

7月31日に統計研連主催，関連学会等共催のシンポジュームが行われましたがその報告は現在整理中です。

学術会議では緊急に安全問題についての声明，あるいは見解を出そうということで，久米均（委員長），吉田民夫（哲学），浜川清（法律），植草益（経済学），吉村功（理学），井口雅一（工学），浅見輝男（農学），角田文男（医学）の8人委員会が作られました。久米委員長は臨界事故の調査委員ですが，趣旨は，個別の事件を越えた一般論として安全問題をどう考えるかを取り上げることです。

第7回計量生物セミナー（臨床の部）報告

オーガナイザー　折笠秀樹・後藤昌司
主催　日本計量生物学会（学会長・吉村功）
平成11年10月15日～16日
富士教育研修所（静岡県裾野市）にて
参加人数：約120名（大学，企業，病院，行政から）
テーマ1．ブリッジング評価における統計学的考察
はじめに，3つの事例，PK/PDを中心に，討論。
テーマ2．EBM時代の臨床統計学
はじめに，厚生省の取り組みと展望，EBM-Review，統計学との関わり，情報の信憑性，討論。
Abstract（63ページ）はあと数部しか残っていませんので，見たい方は出席した方からコピーさせてもらってください。なお，ProceedingsがJapanese Journal of Biometrics付録号に出版されることになっています。現在準備中ですが，できるだけ早いうちに出版できるよう努力します。（折笠・後藤）。

IBC2000参加予定の皆様へ宿泊の重要情報のお知らせ

IBC2000は，2000年7月2日から7日，サンフランシスコのUCバークレーで開催されます。Biometric Bulletin Vol.16, N0.4に登録用紙や学会案内が掲載されています。また，IBC2000のホームページが，
http://www.biostat.ucsf.edu/biostat/IBC2000/
に用意されており，オンラインでの登録もできます。

どちらの登録用紙にも，UCバークレー内の宿泊施設しか案内されていませんが，上記ホームページには「Housing」という項目があり，そこからサンフランシスコのホテルにオンラインでアクセスできるようになっています。ホテルへの宿泊を希望される方は，IBC2000ホームページからご予約ください。

佐藤俊哉　庶務担当理事

会員から

最後の論文『基本的生命物質と基本的生命過程』が雑誌に載りました。関心のある方には別刷を差し上げますのでお申し出ください。
名誉会員　増山元三郎

ご希望の方は事務局までご連絡ください。

編集後記

ニュースレターの主編集担当が変わります。「赤城山から」はこれが最後です。毎号，締め切りぎりぎりの編集になり，原稿催促しつつ催促されることの繰り返しでした。ニュースレター編集では，単なる学会活動の広報のみならず，役立つ情報・楽しい情報を目標にしたつもりですが，どこまでお役に立ったか不安です。お叱りのお言葉（お蔭様で罵詈雑言はありませんでした），励ましのお言葉を頂いた方々，また，吉村会長，佐藤理事をはじめ，原稿をいただいた多くの方々に，この場をお借りしてお礼申し上げます。最後に，新担当の山岡理事の編集に乞うご期待！（今度は「板橋から」かな？）（赤城山から）

日本計量生物学会事務局
〒107-0062　東京都港区南青山6-3-9 大和ビル2F
（財）統計情報研究開発センター内
日本計量生物学会事務局
FAX 03-5467-0482
e-mail: biometrics@sinfonica.or.jp

広報委員会　山岡和枝，林　邦彦
山岡連絡先：
〒173-8605 板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教室
TEL：03-3964-1211（内線2178）
FAX：03-3964-1058
e-mail:kazue@med.teikyo-u.ac.jp